

『一兵卒』の考察

——『第二軍従征日記』を通して見る——

伊 狩 弘

1

田山花袋『一兵卒』¹は明治四十一年一月『早稲田文学』に発表された短編小説で、花袋は満年齢の三十六歳、同月には『土手の家』（『中央公論』）、『県道』（『太陽』）、『古駅』（『文章世界』）、『姉』（『中学世界』）他の作品を発表し、自然主義文壇の中心作家としての地位を固めたので、花袋の作家生涯のなかでも明治四十一年は特筆される一年である。四月十三日からは『読売新聞』に『生』を連載した。しかし通説のとおり花袋の文運は早や翳りを見せ、明治末には博文館を退社し、大正期に到ると『時は過ぎゆく』や『一兵卒の銃殺』など幾編かの新機軸の力作を発表するものの、全体的にはマンネリズムに陥り、大正九年に徳田秋声とともに祝われた生誕五十年祝賀会は文壇の告別式と揶揄されるまでになる。花袋と言うと『蒲団』（『新小説』明治四十年九月）の文壇に与えた影響だけが注目されるくらいがあるが、果たしてそれだけなのか。より普遍的な花袋文学の意味を見出すべきではないのか。そこでこの度は、『蒲団』の衝撃やそこから始まったとされる日本ふう私小説の伝統への影響だけではない花袋の本質や意義といったものを『一兵卒』を読み解きながら探ってみたい。

『一兵卒』に到るまでの花袋の軌跡をおおまかに辿れば、二十歳前後から和歌や文業に志し、桂園派の松浦辰男入門し、そこで松岡国男を知る。また、『穎才新誌』の誌友会を通して太田玉茗と相知った。尾崎紅葉を訪ねた縁で江見水蔭門下生になり、北村透谷の葬儀を通して『文学界』同人との交友が生じた。また花袋は湖処子と多少の面識があつ

たので玉茗とともに湖処子を訪ねたが不在だった。そこで道玄坂の湖処子宅から渋谷村郊外の独歩宅に回り、ライスカレーをご馳走されたのはよく知られる。三十二年に玉茗の妹リサと結婚し、大橋乙羽の世話により博文館編集局に入った。このように花袋はさまざまの人脈によつて文壇に席を占めるようになり、『重右衛門の最後』（三十五年五月）、『女教師』（三十六年六月、『文芸倶楽部』）などを経て三十七年三月に博文館の私設第二軍従軍写真班主任として東京を出発し、五月初めに遼東半島に上陸した。この直前に岡田美知代が上京し、花袋家の二階に下宿、その後リサの姉の家に移つて津田塾に通つた。どちらかと言えば詩人的で空想的な資質を持つ花袋にとつてこの従軍行は生涯を通じての重大事で、世界的現実に向き合う機会であつた。美知代・永代静雄との関係や、芸妓小利飯田代子との交情を外にすると花袋の実人生は割に平坦なものだつた。国内行脚はさかんに行つて多くの紀行文を書いたのはよく知られるが、海外に出たのはこの従軍と大正十二年の満鉄の招きによる満鮮旅行くらいである。愛欲作家のようであるが、海外に出たのではなく、泡鳴や秋声、秋江と比較すれば痴情的でも破滅的でもなかつたのは見て取れるし、藤村のように我執の極致から普遍性を回復するしたたかさや花袋にはあまり見られない。作品的にもセンチメンタルでもすると常套的な抒情主義に陥りがちである。これらは表面的に見ると自身も認めるとおりの凡骨、不器用であつて、特徴に乏しい。しかし花袋は明治から大正にかけて孜々として文筆に執した。昭和三年から亡くなるまで、満年齢でいうと五十六歳以降は病氣と衰弱により執筆量も減つたので、花袋の文学的生涯は『瓜畑』を『千紫万紅』に載せた明治二十四年秋頃から昭和二年頃までの三十六年間程、その間に長編短編の数々、多くの紀行文、多数の評論と批評、『東京の三十年』に代表される回想録などを書いた。その量は現行の花袋全集によつてもかなりの未収録作品などがあることによつて推し量られる膨大なものである。そこには掬すべきものが沢山あるように思える。

『一兵卒』は、多少は類型的表現もあるが全体的には引き締まつた感じの佳編で、日露戦争の片隅で空しく朽ちた一兵士の死ぬ前の一日を鋭く描き出している、ある意味で反戦的な小説とも読める。一定程度主張の見えるという、花袋には珍しい小説である。「渠は歩き出した。」という短い書き出しは、『蒲団』の「小石川の切支丹坂から極楽水に出るだらく坂を下りようとして渠は考へた。」より、切迫した強い印象が伝わる、『田舎教師』の有名な書き出し「四里の

道は長かつた。」に近いものがある。この三作については花袋の歩行感覚とでも言えるものが感じられ、斃れる所まで歩くのが人だ、といった花袋の人生観をも感じさせる。その短い書き出しに続き、「銃が重い、背囊が重い、脚が重い、アルミニウム製の金腕かたむねが腰の剣に当つてカタ／＼と鳴る。其音が興奮した神経を夥しく刺戟するので、幾度かそれを直して見たが、何うしても鳴る、カタ／＼と鳴る。」という漸層法的な叙述がある。この描写のもとにあるのは、『第二軍従征日記』（以下『日記』と略記）八月二十五日の件、海城の兵站病院にいた花袋に聞えたもの「夜になると、附近に宿営して居た兵士が皆な前進運動を起して居るのが明かに聞えて、幾隊幾隊と続いて行く靴の音、その絶間には腰のアルミニウムの金腕のかた／＼と鳴る音、それが終夜よもすがら、熱にうかされたるわが耳に触つた。／絶望！ 絶望！」であつて、二等卒加藤平作に耳障りの金腕の音は、じつは遼陽作戦に遅れを取つた花袋自身の経験だつた。また、加藤平作が病院を抜け出して歩き始めた直接の理由であるところの病院の「衰頹と不潔と叫喚と重苦しい空気と、それに凄まじい蠅の群集」なども花袋の病院体験を誇張したものである。花袋は海城の兵站病院に入院したのだが、作中の加藤平作はそこより二十kmほど北に位置する新台子の兵站、その外れの少し前までロシア士官の家だつた建物を酒保にしていたその建物の一室で寂しく死ぬことになつてゐる。小林修の指摘²については後述するが、新台子には九月四日、花袋はようやく退院して海城から貨車に便乗し、東煙台を経由し夕方到着した。司令部近くで食事をし、宿舎に行く。『日記』は次のようにある。

辛うじて飯を得て、さて導かれた宿舎は、五町ばかり隔つた、同じく線路に添うた、監視兵の建物で、其処に行つた時は、もう日が暮れて真闇になつて居たが、其入口の処に、酒保が大釜に火を燃して、頻りにしるこを兵士に売つて居るのを見た。

自分等の寐た室は、酒保の店と背中合になつて居て、幸ひ其処イ、ペンヂユに日本酒があつた為め、田中少尉は麥酒の空罎に一杯詰めさせて、自分にも飲めと言つて勧めて呉れた。日中は暑くつて堪らぬのであるが、夜は秋の中頃でもあるかのやうに冷やりとして、野にはさびしい秋の風、壁間にはこうろぎの声と言ひ知らずあはれを催して、病後の身の、自分はさまざまのことを思つたので。

右に引用したとおり、花袋は海城からまず鞍山站まで貨車に便乗して行き、線路沿いに戻ってくる遼陽首山堡での負傷兵を見ながら新台子に着いたのだ。小林の論文によれば、モデルと見られる加藤雪平は遼陽首山堡の戦闘で戦死したのであり、新台子の兵站部で病死したのではないのだが、『一兵卒』では加藤平作がやつとの思いで辿り着いた新台子では、「新台子の兵站部は今雑沓を極めて居た。」とあつて病兵を構う余裕はない。一盒の飯を得た加藤は「此処から真直ぐに三四町行くと一棟の洋館がある。其の洋館の入口には、酒保が今朝から店を開いて居るからすぐ解る。其の奥に入つて、寝て居れとのことだ。」と言われ、その家を目指した。

成程、其の家屋の入口に酒保らしいものがある。暗いからわからぬが、何か釜らしいものが戸外の一隅かたすみにあつて、薪の余燼が赤く見えた。薄い煙が提灯を掠めて淡く靡かすいて居る。提灯に、しるこ一杯五銭と書いてあるのが、胸が苦しくつて苦しくつて為方がないにも拘らずかすはつきりと眼に映じた。

かくて加藤二等卒はこの洋館の一室に転がり入つて倒れてしまう。そして苦しいなかに「床近く蟋蟀こほろぎが鳴いて居た。」のを聞いて、「其の哀切な虫の調が何だか全身に沁み入るやうに覺えた。」のである。そして断末魔の平作は蟋蟀の鳴き声を聞きながら死んだ。『日記』に徴すれば、花袋は新台子の先にある鞍山站を越えて沙河兵站司令部まで病んだ体に鞭打つて進み、首山堡からさらに戦争後の遼陽に入った。しかしこの時花袋はまだ体力が回復せず、遼陽に入つても戦跡をつぶさに見て回る余裕はなかつた。そこで『日記』は伝聞による記述が多く、特に宇品以来親近した橘大隊長の戦死の聞き書きが目立つ。橘は広瀬中佐とともに軍神扱いされた軍人で、東宮殿下の誕生日である八月三十一日に首山堡の一角で戦死した。広瀬中佐ほどには英雄化されなかつたものの橘大隊長の人格や奮闘振りは大いに喧伝された。

この間、花袋は病院で同室だつた横山曹長のほか、遼陽近くで幾度か第十八聯隊の兵士を見かけたことを戦闘の伝聞記事の合間に記している。従つて『一兵卒』が自分の体験と第十八聯隊の兵士との出会いを合わせて創作されたことは疑えない。ただし、加藤平作のモデルが加藤雪平だとすると首山堡で戦死したはずの兵士を何ゆえに新台子で脚氣衝心死させたのが問題であろう。

『一兵卒』は無名の兵士の病死を扱った作品だが、末尾近くになって居合わせた別の兵士が彼の軍隊手帳を探し出して読む。「三河国渥美郡福江村加藤平作」と読むその声を、瀕死の加藤は聞きながら、「故郷のさまが今一度其の眼前に浮ぶ。母の顔、妻の顔、櫛で囲んだ大きな家屋、裏から続いた滑かな磯、碧い海、馴染の漁夫の顔……。」を思い出しつつ加藤は今の苦痛からの解放を願う。そして「九月一日の遼陽攻撃」の少し前に死んだのである。さて、この具体的な出身地や人名については小林修ほかの考察があるのでそれを元に考えたい。小林によれば、愛知県渥美郡渥美町戸籍簿に「愛知県渥美郡福江村大字畠村五十四番戸加藤雪平／明治参拾七年八月参拾壹日清国首山堡附近ニ於テ戦死／全年拾月式拾日届出同日受付^④」という記載がある。また、同町潮音寺の墓碑銘には「一貫正忠居士／陸軍歩兵上等兵勲八等功七級／加藤雪平墓／明治三十七年八月三十一日／清国遼陽於首山堡戦死／明治三十九年九月建之 加藤庄作」（小林一郎によれば、墓の左側面の碑文は功五級、加藤庄作の上に「父」の字あり）とある。また、潮音寺過去帳に「加藤雪平／三十七年征露戦役八月三十一日清国於首山堡戦死／第十八連隊九中隊予備歩／一貫正忠居士」とあり、小説の加藤平作のモデル若しくは借用人物は福江村の加藤雪平に間違いなさそうである。小林一郎も小林修説を参照し、さらに民俗研究家清田治の筆写した明治末期の福江村地図を参照して、加藤家の位置などを特定している^⑤。

それによれば、渥美半島福江村の海近く、街道沿いに加藤庄作家があり、すぐそばに加藤と花袋とを結びつけたと思しき宮川春汀の実家渡辺家がある。この宮川春汀は明治六年十一月に福江村で生まれ上京して富岡永洗門下、後に竹内桂舟門下となって挿絵を描いた明治の挿絵画家であり、硯友社の周辺画家として多くの挿絵を描いた。花袋とは博文館関係の人々や水蔭、小波らを通じて知り合いになったと小林一郎は推測しているが、小林修指摘のように、明治三十年から翌年にかけて玉茗、国男、独歩、湖処子、春汀らの交友に花袋も加わったのであろう。この交友によって明治三十一年夏の松岡国男の伊良湖岬滞在が生じ、伊勢一身田の専修寺の中学に赴任していた太田玉茗の訪問もあり、花袋もま

た春汀の招きによって明治三十一年八月二十八日から九月四日または五日まで、伊良湖村村長小久保惣三郎邸に滞在したのであつた。蛇足だがこの滞在中に国男の拾つた椰子の實の話から藤村の『椰子の實』が生まれたので、『椰子の實』と『一兵卒』には因縁があるとも言える。春汀はその前年に結婚したばかりで、玉茗の妹との結婚を控えた花袋は新婚の春汀に対して特に親しみを感じたと思われる。しかし加藤雪平が三十一年七月に伊良湖村山本佐吉長女ひさへを嫁に迎えたのは事実だとしても、そのことを春汀・花袋の結婚に結び付けて三十一年夏の段階で新婚の加藤雪平のことが強く花袋の記憶に止まつたという小林修の推測には疑問が残る。花袋が戦地に赴くのは六年後で、『一兵卒』が出来るのは更にその三年後であり、伊良湖滞在から十年近くの歳月が経っている。従軍の間、既述したとおり花袋は度々第十八聯隊に親しく接近したので、あるいは加藤雪平のことを聞く機会があつたとも考えられるが（極度に緊迫した臨戦態勢の兵士たちを考えるとこの可能性は乏しい）、いかにして十八聯隊の加藤雪平が『一兵卒』の加藤平作になつたのか。

『日記』に徴すれば、花袋ら一行が広島から宇品を発つときから、十八聯隊に親近した。宇品の港で十八聯隊の乗る信濃丸を見たところを次に引く。

十八聯隊は名譽の聯隊、日清戦役に於ける佐藤少将の驍名は国民の皆知れるところであるが、この聯隊が丁度柴田君の故郷に当るので、其縁故で、聯隊長石原大佐（応恒）を識り、広島滞在中、其聯隊の紀念撮影を為て遣るやら、其の送別の宴会に聘まねばれるやら、随分よく訪問しては邪魔を為た。（中略）あゝその名高い、勇しい尾三遠の勇士は、実にかの船に乗つて居ると思ふと、自分等は一種他と異なる情を覚ゆるのであつた。

このように十八聯隊と花袋とは縁が深かつたわけだが、それにしても三十一年の伊良湖探訪を加藤雪平の戦死とその変形たる加藤平作の脚気衝心死にストレートに結ぶことは躊躇される。小林修は伊良湖滞在と『一兵卒』とを結ぶ三つの可能性として、加藤雪平は小説にあるとおり一日未明に新台子の酒保の建物で病死し、花袋は四日に新台子で聞いたという推測。これは墓碑の内容と大きく齟齬し、また『日記』にもそのような記載はない。そもそも『日記』には脚気だけでなく戦病死の記述が無いので、花袋が何故脚気衝心に焦点を当てたのが問題である。というのも、戦死と戦病死では軍隊内の評価も世間的評価も扱いが大きく違つたはずで、加藤雪平の墓碑に「戦死」「上等兵」云々とあるの

で明らかに加藤雪平は名譽の戦死を遂げたもので、戦病死ではなかったと考えられるのである。第二の可能性として挙げた、九月六日以後の遼陽滞在中に加藤の死を知り、取材したという推測。これも橘少佐は特別であつて、遼陽戦では全部で二万数千人が死傷したと言われ、それらの死傷者について一々知ることも調べることも不可能だし、花袋ら従軍記者にはそのような権限は与えられていなかったものと考えられる。これはやはり小林修の第三の推測、帰国した後春汀から加藤の戦死を聞き知つたと考えるのが最も自然である。春汀は帰郷した折にでも聞いたことを博文館の編集室かどこかで花袋に喋つたのではあるまいか。小説の全体的な醸成過程という点では、小林一郎は小林修論を参照して『一兵卒』は、花袋が、海城を出て、翌日の四日に泊つた「新台子」の酒保の光景と、六日首山堡に到着する間の十八連隊の兵士の動き、特に、負傷者の動きを目撃して、橘大隊長の戦死を通して考えた、戦死者の霊に手向ける心とが一緒になつて創作されたものなのである。」と論ずる。大きく見れば、それでいいとも言えるが、これまで見たように三十一年の伊良湖滞在から四十一年の『一兵卒』にいたる十年はもう少し検討が必要であらう。

小林一郎は、『一兵卒』論——その「神秘性」にふれて——とあるように、この作品について掬すべき見解を提起している。それはこの小説のあちこちに書き込まれている「影」や「虫の声」あるいは野原の様子や空の広がりといった情景描写が、戦場の悲惨さを「象徴性・神秘性」に転じさせる働きをしている。そして死に近い一兵卒の耳目に届く蟋蟀の鳴き声や星明かりなどは、「別の世界への参入を物語つている」のであり、それは松浦辰男から受けている「かくり世」の世界なのだと言ふ。小林はさらに「事実」「体験」「経験」そして、それ等の「観察」「描写」の底にあるものは、この「かくり世」の世界であり、「世界思想」であつたのである。これは「伊良湖」を問題にし、柳田が藤村に「椰子の実」をつくらせたこともつながるし、それは、一方に、ローデンバッハを考え、『姉』や『隣室』をつくらせているものであつて、これはやがて『生』にも延びて行くのである。」と述べている。花袋の抒情の根本に和歌的な世界のあることは見やすいし、所謂死の世界に親炙する情動が働くこともその通りだろう。『一兵卒』が「かくり世」へのアプローチであるとする小林の見解は意味深い。その示唆のもとでもう少し考察したい。

3

『一兵卒』が当時の文壇にどのように迎えられたかについては、小林修・小林一郎両説に縷々引用されていて、贅言を要さない。概観しただけでも『新潮』（明治四十一年一及び三）において小栗風葉、生田葵山、生田長江、徳田秋声が評価し、『趣味』（明治四十一年二及び五）で同じく生田長江、水野葉舟ら、『太陽』（明治四十一年二）では長谷川天溪が評価している。『早稲田文学』（明治四十一年四）では片上天弦が評価しており、『中央公論』（明治四十一年二、三）の「月旦」では瀧田樗陰が諸家を評した長文の真つ先に花袋を批評し、まず『一兵卒』を「注目すべき一作品」とし、次いで『土手の家』『県道』を合わせて「相応に読み応へのある作」としている。小林一郎はその他にも同時代評を博搜していて、自然主義の全盛期であるにせよ、広範囲に評価されたことが窺える。樗陰が、花袋・秋声・独歩・白鳥らを相当に評価しているのを見ると時代の雰囲気知れる。

ここまで『一兵卒』の周辺を説明したが、この作品には花袋の文学を考察する上で重要な問題がまだ残されている。つまり八月三十一日に首山堡附近で戦死したはずの加藤雪平を、花袋は九月一日未明に新台子で病死したというふうに変更したわけだが、まず日にちの問題としてなぜ一日にずらしたのかという疑問がある。四日の官報に「遼陽占領」の報が載っているが、遼陽の完全な制圧を詳しく伝えたのが九月七日の官報であった。それなどを見ると、八月三十日、三十一日の首山堡攻撃は雨と泥のなかの戦いで凄烈を極め、また同じ頃第一軍が太子河渡河に成功し遼陽攻防戦の帰趨は決したようだ。その後は退却するロシア軍を追撃し、四日朝には全く占領した。花袋は既述したように首山堡の激戦地からかなり遠い海城の兵站到病臥していたので、『日記』（九月一日）にも、「昨日も終日砲声。今日も砲声、砲声。」などと、砲声を聞いただけであった。そこで花袋としては自分の体験を重ね合わせつつ、さらに加藤の戦病死を前線から遠いところでの孤独の死と仮構するために九月一日にずらしたのではないかと想像される。

これは、後に『田舎教師』の林清三即ち小林秀三に関する改変問題とも関わる。実在の小林秀三は明治三十七年九月

二十一日に満二十歳六ヶ月で死んだものを、花袋は作中では遼陽占領の祭りのあった九月七日に、行列の万歳の声を聞き、「今日は遼陽占領の祭だね」と言いながら死んだことにした。⁽⁵⁾

日本が初めて欧州の強国を相手にした曠古の戦争、世界の歴史にも数へられるやうな戦争——その花々しい国民の一員として生れて来て、其名譽ある戦争に加はることも出来ず、その万分之一を国に報いることも出来ず、其喜悅の情を人並に万歳の声に顕すことも出来ずに、かうした不運な病の床に横つて、国民の歓呼の声を余所に聞いて居ると思つた時、清三の眼には涙が溢れた。

屍となつて野に横はる苦痛、その身になつたら、名譽でも何でもないだらう。父母が恋しいだらう。祖国が恋しいだらう。故郷が恋しいだらう。しかしそれ等の人達も私よりは幸福だ——かうして希望もなしに病の床に横つて居るよりは……。かう思つて、清三は遙かに満洲のさびしい平野に横つた同胞を思つた。

いま引用した清三の思ひは、『一兵卒』中で「母の顔、若い妻の顔、弟の顔、女の顔が走馬灯のごとく巡回する。」以下の、平作の思ひと対になるものでもある。満洲の野では二十七歳の病兵が故郷を思いながら死に、羽生では二十歳の青年教師が満洲の野で死ぬ兵士のほうが自分よりは幸せだろうと思つて死んでいった。こうして、『一兵卒』と『田舎教師』は死んだ日を少しずらしている点でも、また病気の若者が時代の主人公になれないまま空しく滅びるという点でも相似形を為す。『蒲団』において花袋は「圏外」者の苦悩を一つのテーマにしたが、明治三十七年から四十年にかけて花袋の心境に何か変化はあったのだろうか。岸規子はその点に触れて次のように述べる。⁽⁶⁾

また、『第二軍從征日記』（明38・1）では、花袋は戦鬪風景を叙述しながら、「壯觀」「愉快」という言葉を繰り返して書き込んでいた。さらに戦場跡を歩きながら、その風景に詩情を見出してさえている。これは花袋が傍觀者の立場にあつたためであるが、三年後の『一兵卒』『死屍』になると、花袋は人間の死の生々しさを作品に描くことができるようになった。そして事件の面白さよりも、死にいく人間の姿を凝視し、死のもつ悲惨さを読者に伝えられるようになったのである。

岸のこの論考は花袋の心境変化について多くの示唆を与えるものであるが、どのようにして花袋の筆致に変化が生じ

たか。年齢的なこともあるだろうが、花袋自身が戦場で病臥し「圏外」の苦渋を嘗め、また岡田ミチヨの問題で苦々しさを味わったことなどの影響はまず考えられる。また三十九年の『破戒』刊行は花袋にも大きな衝撃ではなかったかと思う。花袋は何かにつけて藤村にアドバイスしたり、得意の外国文学の知識を提供したりする文壇の先輩であった。事実藤村は散文作家としては、花袋より十年も後発の新人だったものがその立場は『破戒』の成功によつて逆転してしまふ。花袋は己の為すなきを慨嘆したのではないだろうか。また独歩はまだ生きていたけれども、独歩社は四十年四月破産する。その前月に独歩と酒を飲んだ花袋は独歩宅に戻つて羊羹と間違つてマツチ箱を齧る、有名なマツチ箱事件を起こした。それを小杉未醒が目撃して書いたわけだが、その後三人は独歩社の行く末や友情を思つて泣いたという。そして十一月には兄実弥登が結核で死んだ。この実弥登の死にいく様子は『兄』（『太陽』明治四十一・四）に克明に描かれている。小さい成功と大きい失望を味わい、とみ、こと、とし、という三人の妻を持つた実弥登は、「蒼い瘦せこけた顔、いなごのやうに細くなつた腕、穩かに閉ぢた眼」となつて青山の共葬墓地に埋葬された。「ザツツオウル！ 何と好い言葉だらう。何んな悲哀でも、何んな煩悶でも、何んな苦痛でも、何んな苦しい生活でもザツツオウル！」と花袋は書いた。熱にうかされて大森海岸に建てた「新しい家」の妄想をしゃべつた兄のことを思い出して、「墓——墓は實際『新しい家』だ。」という名文句を付け加えた。兄の人生を顧みて花袋は書く。

兄は少くとも優しい弱い性質であつた。生活の路に横つて来る種々の困難も羈絆きづなも、すべて所謂『美しい感情』で円満に切り抜けて来た。いかなる場合にも敵をつくるやうなことは無かつた。

つまり運命に従つた人だ。僕などの考では運命などといふそんな盲目的なものに屈従して仕方があるものかと思ふ。生死、要するにこれは自然力で、背景は総て空虚だ。同情も犠牲もあつたものぢやない。進めるだけ進む、活動されるだけ活動する、己を尽していけなければ一死あるのみだ。犬のやうに死にたい。動物のやうに死にたいとは僕の意見だ。で、僕は兄の消極的なのを幾度となく諫めた。止むを得ずんば母にも抵抗せよ。極端なる個人主義たれ……と言つた。けれど兄にはそれは出来なかつた。美しい感情、弱い服従、憐れなる醜い生活——

このように花袋は兄の柔弱や調和的なことを詰つてはいるようだが、じつはこの批判は自分に向けたものでもあつたと

思われる。花袋自身「圈外」者の悲哀を嘗めたのは、古風な家族主義や封建的抑制意識があったために花袋を旧弊な人物に押し留め、近代的個人主義者たらしめなかつたことによると考えられる。そして『兄』の他に、この時期の花袋は亡くなった家族を回顧している。『姉』（『中学世界』明治四十一・一）は、やはり小林一郎の精査が役に立つわけだが、明治四十年秋に館林を訪問した記憶に基づく。しかし小林の調査によるとここに書かれる姉は「花袋の記憶違いか、創作か」によって事実とは少し違うようである。しかしここで花袋はまず田舎と都会を比較し、田舎の人間は過去にのみ生活している。「過去にのみ生活せる人間は禍である。過去にのみ生活せる人間ははげ場のない沢水と同じく腐敗して了ふ。祖先の事業に執着し、祖先の紀念に生活するのは、それは美事には相違ない。けれど平凡に安んじ、平和に安んじ、過去に安んずる人間は人間としての弱者である。歴史を排せよ、習慣を排せよ、而して突進せよ、奮闘せよ」と故郷の人々を戒めたいなどと書いている。これまた花袋は自分に向けて発信しているとも言える。花袋は文学的改革者ではあつたけれども、生活や人生では保守的過去のあつた。そのような自分の弱さを薄々気付きながらもどうにも出来ない。この小説では「明治四年一月五日、涼光操清童女」とある「姉」（小林によれば叔母）の死を考えて、この姉が夭折しなければ自分はこの世に出でることもなく、「つまらぬ恋をしたり、馬鹿々々しい勉強をしたり、屁録（へりく）な拙い小説を作つたり、人と喧嘩したり、世と反抗したり、三十七八にもなつて、こんな処にまごつて、女々しい故郷の追懐などに耽らなくつても好かつたのだ。」と弱気になつて愚痴を漏らす。そして「時の力」を思つたと言う。この「時」は、小林一郎も触れていて、「年月を飛び越え、「現実」の思いに悩む自己の出現を、過去よりの呪縛と対させながら、ひいてはそれのとりこになつてしまい、過去を、そして現在を積極的に永劫の世界に転ずるところまで到達できず、一種のあきらめの様な形にしてしまつてゐる」と、花袋が半ば過去のとりこになり、諦めの境地に浮遊するように論じている。卓見であるがさらに一步進めてみれば、花袋は日露戦争での体験や帰国してからの苦渋や敗滅の体験のなから知らず知らずのうちにそうした滅びとしての過去に絡め取られることを方法化していたのではないか。

同じ頃発表した『祖父母』（『中央公論』明治四十一年四月）でも、祖父や祖母の思い出を母からの伝聞などを交へつつ活写し、山形の高嶺陣屋から館林に国替えした時の思い出まで語っている。そして気難しかった祖父と父母との間は

平穩でなく、「母は私等子供の爲めにのみあらゆる苛責をも忍耐し尽したと私等に語つた。」とあるように、九年前に死んだ母と、二十年前に死んだ祖父母を強いて思い出している。これはやがて『時は過ぎゆく』に再録される質のものであるが、近代に取り残された地方と人々の愚昧と痴情を描いた『土手の家』ほかの作品に並べてみたとき、そこには一つの方向性や方法が浮かぶようである。それは、人間の卑小さや愚昧さ、時の流れや時代の推移にたいする無力さ、無意識な民衆たちの孤独と死などである。花袋はそれまでのセンチメンタリズムの進化として自己疎外や他者疎外までも様式化し、ある意味で西洋的近代に対抗しようとしたのではないか。その表れとしての地方性・血族意識・土俗的痴情・没合理性などを意識的か無意識的か判断しづらいついけれども、作品化していったのではないか。それは花袋自身の無常哲学に沿うものでもあり、また花袋流の「露骨なる描写」意識にもかなるものだったに違いない。現実を剔抉するとは時代の華やかな表面をなぞることではなく、その裏側にいつも沈淪し廃滅していく人々こそ積極的に描かねばならない。花袋自身も未来的可能性としての近代を望むのでなく、廃滅の過去世界と、これからもそのような世界に住せざるを得ない人々の描出、そうした世界への親近感を持ち続けることにアイデンティティーと気安さと方法論とを見出したのではないか。過去は滅びの世界で、未来もまた滅びに通ずるといふ観念で、それはやや安易な人生観であるけれども、下層庶民の意識に近いものだろう。

そのように考えると、『一兵卒』が戦死でなく、脚気衝心死に、デIFOオルメされたのも納得いくようだ。花袋がどのような経緯で脚気衝心に逢着したか定かでないが、戦争中から海軍は高木兼寛の貢献で麦飯が普及し脚気は皆無なのに陸軍では脚気が猛威を振るつた。調査が必ずしも正確とは言えないようだが、陸軍の脚気死者は二万七千八百名という大変な数字である。ここに小池正直・森鷗外らのドイツ仕込の脚気細菌説などが影響したのはよく知られる。陸軍でも平時は麦を混ぜていたのが戦時は一日に白米六合供給としたため急激に脚気患者が増えたようだ。しかし花袋がそもそも脚気衝心をどの程度理解したかは不明で、まして麦飯が脚気に良いといった認識を持ったとも思えない。おそらくは新聞や知人から聞いたのであろう。明治四十年一月に『新古文林』に発表した『隣室』はやはり脚気衝心で死ぬ話だが、その苦しみ方は「あゝ、苦しい」とか「あゝつらい、つらいナ」とか、『一兵卒』における「苦しい！ 苦し

い！」と大同小異で、さほど実感的ではなく、花袋の脚気理解の程度を露呈したものであろう。脚気の病状を詳しく調べた形跡は窺えない。従つて『一兵卒』は、やはり花袋の腸炎を脚気に置き換え、病によつて前線から取り残され惨めに死ぬ兵士を仮構し、もつて活発な現実の最先端から脱落し、或いはそのような活動的世界からそもそも締め出され取り残される者たちの悲哀を、戦場の場を借りて描かんとしたというのが適當ではないか。この筆法を花袋の方法という、意識性に乏しいようだが、近代の本体は近代的制度であり、制度化された生活の諸形態というふうに見える、花袋の描いたものは制度化されない人々の暮らし、情、関係などであつて、そのようなものを兀々と書き続けた花袋文学は、自然主義文学という近代文学の最先端を切り開いたと同時に、近代の裏側に存在し続けた非近代の日本を歴々と描いたと言えないだろうか。

一編の小説として見れば『一兵卒』には幾つかの弱点がある。小林修は花袋の心理小説の可能性を指摘したが、同時に不自然な心理描写が多すぎる。新台子まで歩く加藤平作は「母の顔、若い妻の顔、弟の顔、女の顔が走馬灯のごとく巡回する。」とあり、以下に神楽坂の賑やかさが思い出されるなどもその一つで、死ぬ間際にも母の顔や故郷の家を想起するが、そのようなことを病兵は思い出さないと断言しないが、そうした思いをさせることで、死に瀕した兵士や桜井忠温『肉弾』が描いた戦争の苛烈などが薄められ、迫力がなくなつた。ついで加藤は「軍隊生活の束縛ほど残酷なものはない」と思つたり、「脱走」を考えたり、「神が此の世にいますなら」と思つたりもし、ついに「おい／＼声を挙げて泣出した。」という。これも軍人が決して神を思わぬとか、泣かぬとは言えないものの、敵も味方も関係なく膨大な戦死者を出した戦場において神や涙は不要な感傷であらう。だから言うならば戦場の悲劇は心理的であるより直接的外面的であるほうが訴える力は強いだろう。花袋の心理描写は逆効果であつた。また加藤が下士に対して「馬鹿奴、悪魔奴！」と呪詛するなど、反軍意識の現われとも言える箇所がある。そのような意識を持つ兵士もいたかもしれないが、全体的に兵士は義勇をもつて戦つたものであろう。いまなおあちこちの神社などに建つ尽忠碑や日清日露戦役の戦死者を祀る碑を見ると、一家の主や息子を取られ、多額の税金を取られながらも国難に立ち向かつた人々の素朴なナシ

ヨナリズムが見受けられる。従つて『一兵卒』は花袋の人間卑小主義、滅びに絡め取られようとする方法によつて、戦病死する哀れさを掬いあげる成功は収めたものの、強大なロシア軍に立ち向かつた小さな日本という戦場の真実を伝える点では弱かつたと言える。しかし『花袋集』第一（易風社、明治四十一・三）と『花袋集』第二（佐久良書房、明治四十二・三）全体を眺めると、花袋の方法によつて近代の裏側に澱んだ人間たちの姿が如実に伝わるのである。

注

- (1) 花袋本文の引用は『定本花袋全集』（臨川書店、平成五年）や明治文学全集『田山花袋集』（筑摩書房、昭和四十三年）などによるほか、初版本を参照した。
- (2) 小林修「一兵卒」試論（『南日本短期大学紀要』第四号、昭和四十六年十二月）参照。
- (3) 小林一郎『田山花袋研究—博文館時代(一)—』（桜楓社、昭和五十四年）参照。
- (4) この紀行文「伊良湖半島」は『太陽』（明治三十二年五月五日・二十日）に掲載され、同年九月『南船北馬』（博文館）に収録された。
- (5) 『田舎教師』については岩永胖『自然主義文学における虚構の可能性』（桜楓社、昭和四十三年）や宮内俊介『田山花袋論攷』（双文社、平成十五年）など参照。
- (6) 岸規子『田山花袋作品研究』（双文社、平成十五年）参照。
- (7) 独歩については黒岩比佐子『編集者 国木田独歩の時代』（角川学芸出版、平成十九年）参照。
- (8) 脚気問題は吉村昭『白い航跡』（『産経新聞』平成元年七月〜平成二年七月、単行本は講談社、平成三年）や坂内正『鷗外最大の悲劇』（新潮社、平成十三年）を参照した。